

## 令和3年度秋田県放課後児童支援員等資質向上研修 研修レポート抜粋

(誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります。)

### 県北会場

#### 科目 ①障害児の支援

- ◆ 具体的な支援やこだわりへの支援など、普段意識しているつもりでも忘れがちになっているときがあるなど反省した。言葉がけにしても、一人ひとりに合わせたほめ方や具体的な言い方、言葉の変換など、改めて自分の課題とし、今まで以上に努力したいと思った。見える障害と見えない障害についても、その人の困り感に早く気づき、工夫した対応が出来るようにしたいと思った。子ども達が過ごしやすい空間を作るためにはもっと工夫が必要だと感じた。
- ◆ 今回の研修で特に興味を持ったことは、ユニバーサルデザインについてです。障害がなくても支援を必要とする子どもはたくさんいます。発達障害のある子どももそうでない子どもも、あると便利で分かりやすい工夫が私達の生活に当たり前にあるといいなと思いました。どうしても見える障害に重きを置いてしまう傾向があります。何に困っているのか、それぞれが抱える苦手・不便さに気付ける支援を心がけていきたいと思いました。
- ◆ 今回の講義では具体的なエピソードが多く、ユニバーサルデザインな支援の重要性を学ぶことができました。特に「多数派と少数派」のお話はとても心に残り、考えさせられました。また、常にほめるところを探す・リフレーミングすることを意識するなど、日々の支援の中で忘れてはいけないことを再認識しました。発達障害の子どもたちへの対応は全ての子どもたちの過ごしやすい環境につながっているということがよく分かりました。これから支援員同士もリフレーミングしあって、日々の支援をがんばっていきたいと思います。
- ◆ 「見える障害と見えない障害」で対応が変わってしまうこと。目に見える障害だと仕方ないと思えるのだが、発達障害のように見えない障害だと、わがままと思いがちになってしまう。その子に対しての支援員間の共有の大切さ。どんな対応をしていけばいいか話し合い、支援員によって対応が変わらないように、と改めて感じました。困っているのは子ども。忘れないように寄り添いたいです。
- ◆ 「見える障害には寛容になり、見えない障害には健常者と同じものを求めてしまいがち」の言葉は、全くその通りだったと反省しました。診断のついている子どもに限らず、何に困っているのかを見極め、手助けしていこうと思います。障害児ではないけれど生活の流れがスムーズに出来ない児童に、ホワイトボードで手順を伝えたらスムーズに出来るようになりました。毎日口うるさく「次は〇〇」と言っていたのが嘘のようです。